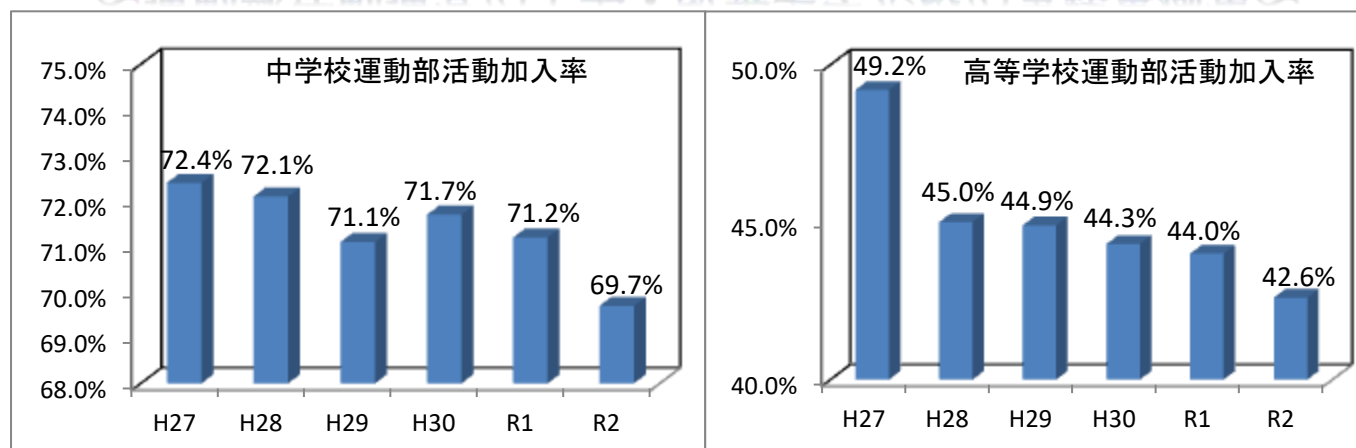


令和2年度

運動部活動運営の工夫・改善事業

～運動部活動運営の工夫・改善モデル校の実践事例集～



本県では、令和元年7月、「茨城県部活動の運営方針」を策定しました。「適切な運営のための体制整備」、「合理的でかつ効率的・効果的な活動の推進のための取組」、「適切な休養日等の設定」などを明記し、公表いたしました。

運動部活動においては、従前と同様の運営体制では維持が難しくなっており、学校や地域では存続の危機にあるといわれております。運動部活動を持続可能なものとするためには、生徒のニーズに応じた運動・スポーツの機会を確保することができるよう、運動部活動の改革に取り組む必要があります。

この事業では、少子化による部員数の減少や専門的に指導できる教員の不足に対応するため、複数校が合同で行う拠点校部活動、地域スポーツクラブと連携した活動、生徒のニーズに応じた気軽に運動ができる取組等を実施しております。

各学校におかれましては、本実践事例集を参考にするとともに、休日の部活動の段階的な地域移行という国の動向を注視し、生徒にとって望ましい持続可能な運動部活動と学校の働き方改革の実現に向けた取組を検討し、充実した運動部活動が展開されることを願っております。

P 1、2……拠点校部活動における運営のあり方「ひたちなか市立平磯中学校」

P 3、4……学校統合に向けて拠点校部活動を運営する上での工夫・改善「ひたちなか市立阿字ヶ浦中学校」

P 5、6……拠点校部活動における運営の工夫・改善「坂東市立岩井中学校」

P 7、8……生徒の実態・ニーズに応じた体力向上を支援する部活動運営の在り方「茨城町立明光中学校」

P 9、10……学校と地域・民間が協働・融合した運動部活動支援体制の構築「つくば市立谷田部東中学校」

運動部活動運営の工夫・改善研究校の実践

研究プラン 中学校拠点校部活動

学校名 ひたちなか市立平磯中学校

研究テーマ 拠点校部活動における運営の在り方

1 運動部活動の現状

○部活動の概要

- ・部員数は両校合わせて24人（3年生引退後14人）
（阿字ヶ浦中：3年生6人、2年生4人、1年生0人、計10人）
（平磯中：3年生4人、2年生5人、1年生5人、計14人）
- ・阿字ヶ浦中顧問4名・平磯中顧問2名

○研究テーマに向けたポイント

来年度開校が予定されている統合校に向けて、拠点校部活動を実施する。合同で練習することで、単独ではできない実戦に近い練習が可能である。

また、指導や競技経験のある顧問が指導につくことで、専門的な技術指導ができ、生徒の競技に対する魅力が高まったり、技能が向上したりすると考えられる。

2 運営上の工夫

○指導計画・内容

- ・予定や練習内容について各校顧問同士で共通理解を図り、実践に取り組む。
- ・平日に関しては拠点校顧問から出されたメニューを各校で実践する。
- ・休日の練習において家事都合等により出席できない場合は、必ずどちらかの指導者が指導に当たれるよう確認する。

○生徒理解、保護者理解

- ・事前に合同保護者会を実施し、管理職の同席のもと活動方針を生徒や保護者に伝える。
- ・各校の保護者との連絡は各顧問がそれぞれ行う。
- ・各校での学校生活の様子など生徒の情報の共通理解を図る。
- ・定期的に生徒と面談等を通して、話を聞く場面を設け相互理解に努める。

3 活動の内容

- 4～5月：新型コロナウイルス感染症対策のための臨時休業により、拠点校部活動は実施できなかった。
- 6月：阿字ヶ浦中3年生の希望により各校単独での練習を行った。
- 7月：総合体育大会に代わる交流大会に平磯中のみ参加、阿字ヶ浦中是不参加。合同保護者会を開催した。
 - ・7月4日に総合体育大会に代わる交流大会が行われた。
 - ・3年生が引退し、7月11日に新チームが始動。初めての合同練習の後、今年度の拠点校部活動を始めるに当たっての保護者会を実施した。両校の校長と顧問、保護者が参加をし、運営方針の共通理解を図った。
- 8月：ひたちなか市中学校（新人）軟式野球大会
 - ・合同での練習日数は少なかったが、新チーム初の大会参加となり、多くの課題が残る結果となった。
- 9月：ひたちなか市新人体育大会
 - ・全員がそろって合同で練習できる日数が少ない中、成長が見られる結果となった。
- 10月：平日は各中学校で練習、休日のみ合同練習
 - ・東海村近郊中学校軟式野球大会に向けて、新人戦での課題を克服するため、実戦的な練習を多く行った。
- 11月：東海村近郊中学校軟式野球大会
- 12月～2月：平日は各中学校で練習、休日のみ拠点校部活動を行った。

4 実践研究の成果、課題

【研究の成果】

○統合校に向けた部活動運営

- ・2校合同のチームで活動するため、人数の少ない学校の生徒も試合に出場することができ、試合に出場できることの喜びを実感できる活動となった。
- ・1、2年生間の人間関係は良好であるため、統合後もスムーズに部活動運営ができると考えられる。

○拠点校顧問の指導方針の徹底

- ・複数いる顧問の指導を、指導経験の豊富な拠点校顧問の指導方針に基づいた指導に統一したことで、統合チームとしての意識の向上や競技に対する生徒同士の意見交換の内容の画一化が見られた。

【今後の課題】

○生徒同士の良好なコミュニケーション

- ・チーム競技を行う上で、生徒間の良好な人間関係を築くことは重要なことである。「合同で練習を行っていけば、関係は深まる」と考えるのではなく、コミュニケーションが苦手な生徒もいることを踏まえ、お互いをよく知ることができる場などを設ける必要があったと感じた。特に3年生の拠点校部活動に対する抵抗は、これに起因する。

○生徒指導等に関する顧問間での情報の共有

- ・指導方針の徹底や生徒理解を深めることは、両校の顧問にとって必要なことである。さまざまな情報を共有することが、生徒・保護者からの信頼へとつながる。

5 生徒・保護者の声

○生徒の声

- ・統合前に交流できて、仲良くなれたのでよかった。
- ・人数が増えることでお互い刺激し合えてよかった。
- ・土日の練習だけであったので、そろわない日があった残念であった。

○保護者の声

- ・送迎が大変だった。
- ・保護者同士で相談ができずに悩んだこともあった。
- ・視野が広がり、いろいろな意見や発想にふれて、子供の成長になった。
- ・お互いに交流をもつ機会がうまく作れず残念であった。



6 今後の取組

拠点校部活動制度の導入により、競技経験の少ない顧問が担当していても、所属する部員が専門的な指導を受けることができた。競技経験が無かったりする顧問が担当している部活動については、このような方法をとることで、顧問の負担軽減や生徒の向上心を高めることに繋がるのではないかと考える。生徒からは、統合前に交流ができて良かったという意見があったので、統廃合が行われる学校や部員不足で満足に活動ができない学校などについては、このような取組を行えると生徒も安心して活動できるのではないかと考える。

運動部活動運営の工夫・改善研究校の実践

研究プラン 中学校拠点校部活動

学校名 ひたちなか市立阿字ヶ浦中学校

研究テーマ 学校統合に向けて拠点校部活動を運営する上での工夫・改善

1 運動部活動の現状

○部活動の概要

- ・部員数は両校合わせて22人（3年生引退後16人）
（阿字ヶ浦中：3年生4人、2年生0人、1年生4人、計8人）
（平磯中：3年生2人、2年生7人、1年生5人、計14人）
- ・両校とも顧問は2人体制

○研究テーマに向けたポイント

来年度開校が予定されている統合校に向けて、拠点校部活動を実施する。両校の生徒や保護者同士の絆を強めることで、スムーズに来年度の部活動運営が進められると考える。また、2校の顧問で一つの団体を運営することにより、教職員の負担軽減にもつながるよう模索していく。

2 運営上の工夫

○指導計画の作成

- ・月毎に指導内容や指導ポイントについて共通理解を図る。
- ・大会などの日程を考慮し、年間の見通しをもって指導に当たる。

○顧問間での情報共有

- ・拠点校の顧問が指導に当たるが、在籍校の顧問も参加できる場合は両校の顧問で相談し、協力して指導に当たるなど、柔軟に対応していく。

○生徒・保護者の理解

- ・安全管理や活動時のルールを明確に設け、両校の顧問で共有する。
- ・運営方針の共通理解のため、年度初めに両校の校長・顧問、保護者、生徒が参加する説明会を開催する。

3 活動の内容

○4～5月：新型コロナウイルス感染症対策のための臨時休業により、拠点校部活動は実施できなかった。

○6月：拠点校部活動開始

○7月：総合体育大会に代わるひたちなか市内合同練習会、合同保護者会の開催

- ・7月4日に総合体育大会に代わる市内合同練習会が行われた。1年生は参加せず、2・3年生によるチームで参加した。
- ・3年生が引退し、7月11日に新チームが始動。初めての合同での練習の後、今年度の拠点校部活動を始めるに当たっての保護者会を実施した。両校の校長と顧問、保護者が参加をし、運営方針の共通理解を図った。

○8月：休日のみ、拠点校部活動を実施

- ・1年生には基本的なルールやポジションなどの指導を行った。

○9月：ひたちなか市新人体育大会

- ・市内大会では、両校の選手が力を合わせ、見事優勝することができた。

○10月：中央地区新人体育大会

- ・基本的には休日のみ拠点校部活動を実施しているが、大会の直前である7日、8日は放課後の練習も合同で行った。

○11月～2月：平日は各中学校で練習を行い、休日のみ拠点校部活動を行った。

4 実践研究の成果、課題

【研究の成果】

○統合校に向けた部活動運営

- ・2校合同のチームで活動するため、人数の少ない学校の生徒も試合に出場することができ、競技を続けるモチベーションにつながった。
- ・最初は遠慮し合う姿も見られたが、顔を合わせる回数が増えるごとに絆が深まっていったと感じた。また、お互いに技術を高め合っていこうとコミュニケーションを取る場面も多くあった。このことから、統合校が開校された後も、スムーズに部活動運営が行えると感じた。

○顧問の負担軽減

- ・競技経験のない顧問と指導経験の豊富な顧問のバランスをとりながら指導を行った。また、拠点校の顧問の都合がつかない際には在籍校の顧問が指導を行った。そのため、それぞれの顧問の負担が軽減された。

【今後の課題】

本校はこの後統合校となるため、拠点校部活動としての課題はないが、今後別の学校でこのような取組を行う場合は、以下の課題が考えられる。

○2校間の密な情報共有

- ・練習日程や会場はもちろん、生徒指導に関する情報も共有していくべきだと考える。チーム競技であるため、生徒同士の良好なコミュニケーションを図る必要がある。
- ・練習場所が偏ってしまうと、生徒の送迎をする保護者に負担が生じてしまう。一方の学校の保護者に負担が偏らないよう、調整をしっかりと行う必要がある。

5 生徒・保護者の声

○生徒の声

- ・部員数が確保されるため、様々な大会に参加することが可能になってとてもいい。
- ・集団で活動をする中で、様々な考え方に触れたり切磋琢磨したりすることができた。
- ・友達の輪が広がった。
- ・集団の中で生活する上で大切な協調性や社会性を学ぶことができた。
- ・人数が増えることで練習内容の幅が広がり、互いに競い合い早く技術を習得できるため、1校で練習するよりも効率が良い。

○保護者の声

- ・指導経験の豊富な顧問を中心に指導してもらうことにより、子供の技術力も向上している。
- ・来年度統合する子供たちと部活動を通して交流ができているのは、親として安心できる要素である。
- ・人数を確保し共に技術を磨くことで、競争心を高めることができ、人間性や社会性が育っている。
- ・複数の指導者がいることで、安全面に関しても目が行き届いており、安心できる。
- ・休日のみではなく平日にも練習ができると、さらなる技術の向上が図れるので、検討してほしい。

6 今後の取組

拠点校部活動制度の導入により、両校の顧問の負担を軽減するだけでなく、技術力の向上を目指す生徒の要望にも応えることができ、市内大会優勝という実績も残すことができた。今後は統合校となり、拠点校部活動という形ではなくなるが、新たな形での部活動へのよい橋渡しができたと感じた。また、統合する前にこのような拠点校部活動を行うことで、生徒が抱える新設校での新チームへの不安も解消できたと考える。本校では野球部も統合校に向けた拠点校部活動を同様に行っている。合同チームとして大会などに参加するには、中体連の規定による人数制限があるが、練習に関しては練習会場や交通手段などの条件が満たされれば可能だと思われる。今後、県下の学校でこのような統廃合が行われる場合には、今回のような取組を行っていくことが望ましいと考える。

運動部活動運営の工夫・改善研究校の実践

研究プラン 中学校拠点校運動部活動

学校名 坂東市立岩井中学校

研究テーマ 拠点校部活動の運営における工夫・改善

1 運動部活動の現状

○部活動の概要

部員数：(軟式野球部)

岩井中学校 3年生2人、2年生3人、1年生9人

東中学校 3年生2人、2年生2人、1年生7人

※合計25人(3年生引退後は21人)

指導者：

岩井中学校 顧問2人、東中学校 顧問1人

○研究テーマに向けたポイント

少子化が進展し、生徒数が著しく減少していることにともない、部員数が減少し維持が困難になっている状況や、生徒のスポーツ機会の確保及び練習が行えない課題が生じている。拠点校部活動を行うことで、生徒のスポーツ機会の確保と、より有意義な練習を目指す。また、教員の働き方改革が求められている中で、顧問教員の指導に係る負担軽減を図ることができると考える。

2 運営上の工夫

○指導計画について

- ・指導方針や目標、緊急時の対応について顧問同士で共通理解を図った。

○顧問同士の情報の共有

- ・個別練習シートを作成し、どのような練習や指導を行ったかをまとめて、一覧にした。電話やメール等を活用し、練習した内容を共有し、拠点校部活動を実施しない平日の練習に生かせるよう連携を図った。

○保護者等との連絡について

- ・保護者への連絡については、拠点校顧問から一斉メールで連絡を行った。また、練習日の欠席連絡については、各中学校顧問で対応し、連絡を取り合えるようにした。

○練習場所の検討

- ・両中学校間の距離が離れているため、練習場所の検討を行った。両中学校の中間地点となるグラウンドを練習会場とし、生徒は自転車で移動することにより、保護者へ負担をかけないよう工夫を行った。

3 活動の内容

○拠点校部活動の運営

- 1月：市内中学校体育連盟常任理事会において、拠点校部活動の具体的な運営方法や拠点校と在籍校の連絡について検討した。
- 3月：各中学校で、拠点校部活動の運営について保護者への説明をした。
- 4月：拠点校部活動申請書及び承諾書の手続きを両中学校間で行った。
- 6月：両中学校合同での保護者会を行い、運営方法や連絡体制、大会の参加について確認をした。

○活動の概要

- ・主に毎週土曜日(月に1～3回)、祝日や長期休暇の平日(およそ3時間程度)に拠点校部活動を行った。
- ・平日放課後の練習はそれぞれの中学校で行った。

○各種大会や練習試合への参加

- ・それぞれの中学校で9人以上の部員がいるため、大会や練習試合については各中学校ごとに参加し、それぞれの顧問が引率を行った。

4 実践研究の成果、課題

<研究の成果>

○部員の技術力及び意欲の向上

- ・両中学校が集まったの練習は、人数が増えるため、技術レベルごとに分けて練習を行った。それぞれのレベルに合わせた練習を行うことで、部員同士でアドバイスする姿が見られ、意欲の向上につながった。
- ・練習人数が増えたことにより、ポジション毎のブロック練習や、試合形式やランナーを想定した練習を取り入れるなど少人数ではできなかった練習を行うことができた。実践的な練習が増えたため、競技力の向上につながった。
- ・専門的な指導を受けることができるため、技術力の向上につながっている。

○在籍校顧問の負担軽減

- ・在籍校の顧問は、部活動指導を行う時間を教材研究や学年事務、生徒指導等の職務に充てることができたため、業務削減や負担軽減につながった。

<今後の課題>

- ・在籍校顧問への連絡や活動情報の共有化のため、拠点校の顧問に負担がかかることがあった。
- ・活動中に起きた生徒指導について、顧問同士のやり取りだけでなく、中学校間の連携が必要となる。両校や保護者にも理解を得られるよう運営していく必要がある。
- ・他校を含め、部員数の関係によって合同チームの組み合わせが変わると、継続して同校で拠点校部活動を行うことが難しくなってしまう。練習用具や消耗品の購入についても検討の必要性がある。

5 生徒・保護者の声

○生徒の声

- ・練習の人数が増え、ランナーをつけた実践的な練習ができるので嬉しい。よい練習ができていると思う。
- ・他中学校にもライバルができた。より一層練習に力を入れたい。
- ・平日と違った練習を行うことができて新鮮。いろいろな指導を受けることができるため、やる気がでる。
- ・来年度も継続したい。
- ・大会では一緒に練習した仲間と試合に出ることができないため、相手チームとして戦わなければならない、お互いの手の内がわかってしまう。
- ・練習会場までの自転車移動が大変である。

○保護者の声

- ・来年度も継続して欲しい。
- ・学校という枠を超えて交流できるので、コミュニケーション能力を育む場となっていると思う。友達の輪が広がって親として嬉しい。
- ・部員数が減ってきているため、大人数で練習や活動ができて嬉しい。
- ・練習会場が遠い場所となると送迎が必要になるため、毎週となると厳しい。
- ・拠点校部活動ではなく、在籍校だけの練習の時に指導内容が違ってしまうのではないかと。

6 今後の取組

○今後の運営について

- ・今後も拠点校部活動を続けていくためには、保護者や教員の理解が必要となる。保護者会を定期的に行い、課題に対して取り組まなければならない。
- ・生徒指導に対してもスムーズに対応できるようにするために、顧問間の情報交換だけではなく、拠点校部活動について中学校間で認識を広めていく。
- ・今回は2校での活動であったが、市内ではどの中学校も人数不足の状態であるため、複数校での活動体制についても準備を整える必要がある。

○市内での取り組み

- ・拠点校部活動を行ったことにより、部員数の確保をすることができた。市内の中学校でも少人数化が進んでおり、その他の競技においても市内全体で取り組むことができれば、部活動の種目数を減らすことなく生徒の部活動の選択肢を残すことができる。また、教員の負担軽減（指導時間、競技経験のない部活動の指導）についても効果が期待されるため、市内全域で取り組める環境を整備したい。

運動部活動運営の工夫・改善研究校の実践

研究プラン 生徒のニーズを踏まえた部活動の設置

学校名 茨城町立明光中学校

研究テーマ 生徒の実態・ニーズに応じた体力向上を支援する部活動運営の在り方

1 運動部活動の現状

○部活動の概要

本校は運動部活動 14 種目、文化部 2 種目で運営されている。部活動加入率は 98% を超えほとんどの生徒が何かしらの活動をしている。その中で、所属はしているが部活動についていけない生徒、部活動に所属していない生徒にどのような支援ができるかが課題と言える。

○研究テーマに向けたポイント

- ・学校の部活動に所属することに抵抗はあるが、体を動かしたいと考えている生徒のニーズに応える内容とする。
- ・様々な活動ができるように準備をすることで、生徒のニーズに応じた活動ができるようにする。

2 運営上の工夫

○活動日・時間の選択

学校で通常の部活動は平日週 3 日設定しており、時間も季節によって 1 時間～2 時間程度と幅がある。しかし生徒のニーズは様々あると考え、自分で活動日・時間を決めて活動できるようにする。

○練習メニューの選択

自分の体力に応じ、興味ある活動ができるよう複数の種目を準備しておく。

○自由参加制

他の部活動に参加していても、状況に応じて顧問の許可の下、自由に参加できるようにする。

3 活動の内容

○活動日・時間について

生徒が活動日・時間を事前に決めているが、急な変更も受け付け、活動することに負担を感じることなく参加できるよう運営している。

○練習メニューについて

体力テストの結果や、コンピュータを用いたプログラム診断により自己の体力に基づいた活動ができるよう以下の練習メニューを準備した。

- ・コンピュータを活用した運動（体力向上運動、柔軟運動、卓球、アーチェリー、ボウリングなど）
- ・運動器具を用いた運動（バランスボール、ボッチャ、簡易卓球、投球など）
- ・器具を用いた活動（発声練習、リラクゼーション活動など）

○自由参加制について

集団で活動する楽しさを味わうために、顧問の許可をもらい他の部活動参加者も臨時に参加できるようにし、多人数で活動する事も可能とした。また部活動に所属しながらも、リハビリ的活動、心的負担軽減のための参加も可能とした。

4 実践研究の成果、課題

<成果>

○活動日・時間の選択による主体性・責任感の育成

学校のきまりの中での活動が難しく、参加しづらい状況から脱却し、自ら判断して行う活動としたため主体性の育成につながっている。また自由な選択が自己の責任感を育んでいる。

○練習メニューの選択による意欲喚起

以下の点において生徒の変化が見られた。

・運動する喜び

入学時に入部した運動部を継続することができず、休みがちになっていた生徒が本活動で新たに友達と活動することができるようになり、友達と一緒に運動する喜びを味わうことができた。

・気軽にできる環境

人との競争ではなく、コンピュータのプログラムに合わせた活動のため、上手いいかなくても他者の目を気にせず、何度でも挑戦していた。

・自分のペース

自分の体力に合わせた活動のため、また自分のペースで活動できるため、じっくりと活動することができていた。

○自由参加制による協働活動の楽しさ体験

勝利や技術の向上が第一の目的ではないため、たとえ失敗しても周りから非難されることなく、一方で自分一人では達成できないことを克服する喜びを味わうことできていた。

<課題>

○生徒一人一人のニーズへの対応

種目や活動場所など、より多くの要求があった。

○参加人数による活動の制限

種目によっては複数名の参加が必要となるときがある。

5 生徒・保護者の声

○生徒の声

- ・実際にやったことがない運動（アーチェリー、ボッチャなど）だったので、難しいけれど、上手いと思ったらその分楽しさも増した。
- ・体幹を鍛える運動は難しかった。頑張って続けていきたい。
- ・友達に誘われてやったけれど、結構面白かった。普段は部活動中心だが、たまには一緒に参加したい。

○保護者の声

- ・部活動を休む日が多くなっていたが、新しい事をするようで「今日はこんなことした」と言っているの、このまま続けていければいいなと思った。
- ・本人が望むような形でできれば、このような部活動でも良いと思う。

6 今後の取組

学校では、既存の部活動に入って活動することが普通のことであったが、これからの部活動は「勝利や技術の向上が目的」という思いについでいけない生徒にも目を向ける必要がある。そこで、まず教師の意識改革をさらに進め、既存の部活動で悩んでいる生徒には積極的に声かけをしていきたい。また今年度は活動スペース、器具等に制約があったが、生徒のニーズに応えられるよう環境改善を図っていきたい。

運動部活動運営の工夫・改善研究校の実践

研究プラン 部活動地域支援体制

学校名 つくば市立谷田部東中学校

学校と地域・民間が協働・融合した運動部活動支援体制の構築

1 運動部活動の現状

○部活動の概要

本校は生徒数約600名の大規模校で、運動部11種目、文化部4種目が活動している。令和元年度は、多くの運動部が県南大会・県大会に出場している。陸上競技部は関東大会出場、男子バスケットボール部は県新人大会で優勝をしている。顧問は各部2～3人体制をとっている。種目経験者が顧問の部が多いが、未経験の教員が指導している種目もある。働き方改革の取組として、平日の活動日は、3日にしている。活動日が減った分は、洞峰地区文化スポーツ推進協会（DCAA）を立ち上げ、専門の指導者のもと活動を行っている。

○研究テーマに向けたポイント

教員の「超過勤務」や顧問が未経験の種目を担当することによる「指導の負担」など、部活動に関する課題は山積みの中で従前の学校の部活動運営は限界にきている。折しも国会においては「給特法改正に係る附帯決議」において「部活動を学校単位から地域単位の取組」が取り上げられ、早急に抜本的な改革に取り組む必要がある。そこで、学校と地域が協働・融合した形で地域におけるスポーツ環境整備を進め、地域の指導者やスポーツクラブ等民間事業者とも連携して新しい形の運動部活動運営体制を構築する。

2 運営上の工夫

「洞峰地区文化スポーツ推進協会（DCAA）」を設立し、部活動とクラブの共存型で文化・スポーツ活動の支援体制を構築した。

- 種目 陸上競技、バレーボール、男子ソフトテニス、卓球、野球、剣道、女子バスケットボール、サッカー、吹奏楽、女子ソフトテニス、男子バスケットボール
- 指導者 つくばFC、つくばユナイテッド Sun GAIA、つくばスポーツアカデミー、つくテニ 等
- 実施日等 部活動のない日に実施、各種目年間25回、1回2時間
- 会費 1,250円/月
- 事務局 総合型地域スポーツクラブ「つくばFC」に委託
- 部活動日 平日（火）、（水）、（金）の週3日、土日はいずれか1日のみ、朝練は行わない
- その他 部活動共存型受益者負担を基本とし、会費を徴収したり、行政機関の補助金を活用したりすることで、クラブ運営の財源を確保している。

3 活動の内容

1 活動の概要（2020.10現在）

種目	陸上競技	バレーボール	男子ソフトテニス	卓球	野球
指導者	つくばスポーツ	つくばユナイテッド	つくテニ	つくば明光	筑波大学大学院
委託先	アカデミー	Sun GAIA		卓球クラブ	野球コーチング論研究室
活動場所	グラウンド	体育館	テニスコート	柔剣道場	グラウンド
参加人数	10人	15人	11人	11人	14人



種目	サッカー	女子バスケットボール	剣道	吹奏楽	男子バスケットボール	女子ソフトテニス
指導者 委託先	つくばFC	FIRE FLY	谷田部 少年剣友会	茨城県 吹奏楽連盟	GROW	翼々クラブ
活動場所	グラウンド	体育館	柔剣道場	音楽室他	体育館	テニスコート
参加人数	13 人	11 人	6 人	11 人	20 人	8 人



※7月時点の運動部員数（7・8年生のみ）249名 運動部のDCAAへの加入数（7・8年生のみ）92名
2 活動日時

○月曜日（15:30～17:30）陸上競技、バレーボール、男子ソフトテニス、卓球、野球

○木曜日（16:00～18:00）サッカー、女子バスケットボール、剣道、吹奏楽

○日曜日（13:00～15:00）男子バスケットボール、女子ソフトテニス

※平日の日課変更、土日は場所等の関係で時間・場所を変更して行う場合がある。

4 実践研究の成果、課題

【成果】

活動実績：今年度の延べ会員数 7年生77名 8年生42名 9年生32名 合計：151名（12月末現在）

今年度の実施回数 月曜日：16～17回 木曜日：17～19回 日曜日：13・16回（12月末現在）

○専門的な知識をもつ、地域のスポーツクラブの指導者から指導を受けることにより、高度な技能の習得を図ったり、運動・スポーツへの興味、関心・意欲を高めたりすることができた。

・男子バスケットボール部：県新人大会優勝 ・女子ソフトテニス部：県新人大会出場

・陸上競技部：県通信陸上複数種目で入賞 ・野球部：市新人大会優勝 ・卓球部：市新人大会女子団体準優勝

○DCAAで活動することにより、冬場でも活動時間を確保することができた。

○教員は、平日の部活動指導日が減ったことで、その時間を教材研究や授業準備の時間に充てることができたため、時間外勤務時間の減少にもつなげることができた。

【課題】

○部活動とDCAAの連携の際、指導方針の確認をしていく必要がある。

（例 顧問が異動等で代わった時に、大会に向けての活動なのか、楽しむための活動なのか等の方針の違い）

○DCAAでの活動日を増やす場合、会員数の増加と活動費の検討をする必要がある。

5 生徒・保護者の声

○生徒の声

- ・専門の指導者から、より高い技術を教えてもらえるため、運動技能や体力が高まったと感じる。
- ・部活ではチームプレーを中心に練習し、DCAAでは個人技能を高める練習をするので、総合的に成長できる。
- ・冬季期間は部活動の練習時間が短いので、DCAAで練習時間の確保ができる。

○保護者の声

- ・学校との連携があり、安心して通わせることができる。子供が楽しく参加している。
- ・部活動のない日に、体を動かすことでストレスを発散できている。
- ・9年生の引退後もスポーツができる場がある点でありがたい。

6 今後の取組

○安定した運営をしていくために、会費と実施回数の見直しを行っていく。

○運営基盤を強化するために、他校との連携、小学校区への広報活動も積極的に検討していく。

○本取組を広げるためには指導者の確保も課題となるため、意欲のある教員が兼業できる環境を整える必要があることを、多方面に働きかけていく。

○新型コロナウイルスの感染対策やその際活動に制限がかかった場合でも対応できるよう、指導者の確保、会費の徴収方法等を整備していく。